

令和元年 11 月 1 日に思う

もはや常態化したとも言える昨今の自然災害。この課題を何度本コラムで取り上げたことでしょうか。先日の台風 19 号は、台風シーズンが遠ざかった 10 月に、しかもこれまであまり台風による自然災害に縁がなかった東日本において、未曾有の被害をもたらしました。亡くなられた方々のご冥福をお祈りしますとともに、被災地の皆さんへのお見舞いと 1 日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

そんな折、あるジャーナリストの言葉が心に響きました。それは、私たちが長年にわたり訴え続けている「源流の危機は国土の危機」に通ずる話でした。その内容とは、地球温暖化はもちろんのこと、食糧や燃料を供給して国を支えてきた山村や農村が、過疎化や時代の流れに飲み込まれ著しく疲弊し、活力が削がれていった末、守り続けてきた森林や農地が荒廃したことが、昨今の自然災害の要因の一つではないか、と指摘したものです。このことは、まさに我々が危惧してきたことです。ここでふと思い出すのが、スウェーデンの 16 才の高校生で、環境活動家のグレタ・トゥーンベリさんの言葉です。さきの国連での演説で「大人たちは「地球の絶滅のはじまり」になっているのに、経済成長の議論ばかりしている。許せない！！」と。あの衝撃発表と鋭い眼差しは胸に刺さるものがありました。

大人、特に源流に住む私たちには、「自然との共生」のあり方と、暮らしの豊かさや潤いを求めることに、さらなる知恵と行動が必要であると再認識しました。未来の子どもたちのためにも、「水源地の村づくり」に全力で取り組んでいきます。